

《背景と目的》

本実験では、第一子に知的障害のある子どもが産まれると想定した場合における、衝撃の大きさとそれに伴う情動反応をストレス研究の指標を用いて測定し、知的障害への知識や経験の差からなにかいえることはないか検討することを目的とする。

《方法》 質問紙法

1.調査対象者;福祉系大学生 217 名(一般群, 特別学校支援教諭志望群,障害児臨床実習群)

2.質問紙構成

従属変数(①知的障害児出産の主観的衝撃度(衝撃度を測定するネガティブなライフイベント因子)

独立変数(②自閉症に対する機関,知識, 経験 ③ストレス耐性チェック(④対人恐怖心性尺度

統制条件(⑥重度軽度の知的障害児の出生により、将来自分におこりうるイベント資料

まず②で自閉症について各々の元の知識や経験を測る。次に⑥で知的障害の最低知識を統制条件としたうえで、①での情動反応の大きさを測定(従属変数)し、②③④⑤で情動反応に知識や経験、個々の耐性がどう影響するのか、を測定する(独立変数)。

《結果》

福祉の経験,知的障害に関する知識があるとやはり知的障害児出生における情動反応は低い。逆に今まで知的障害者と触れ合う機会や知的障害に関する知識を学ぶ機会がなかったら,未知の不安から知的障害児出生における情動反応は高いという結果になった。やはり軽度よりも重度知的障害児出生の情動反応のほうが高く,それは知的障害児臨床実習群も同じであり,実習先の生徒と自分の子どもとでは受け止めかたが違うということもわかった。また偏見のあまりない特別学校支援教諭志望群では対人恐怖心性尺度と知的障害児出生の情動反応との間に相関があり,主観的偏見を乗り越えた先には世間や親戚,社会といった集団心理による客観的な偏見を気にするひとが知的障害児出生の情動反応が高いという結果になった。

また分散分析においては一般群と特別学校支援教諭志望群との間に偏見問題に差があり,一般群と障害児臨床実習群との間に福祉経験の程度に差があった。そして障害者との関係においては障害児臨床実習群と他の 2 群との間に差があり,知的障害者と密な関係を築いている人ほど,知識も経験も豊富であると結果がでた。現在,偏見の見直しにおいて足りないのは知識や触れ合いの機会であり,知識を備えた上で触れ合いを与え,古代からの偏見の見直しをし,世間に人々が望む共生が浸透したら,知的障害児出生の情動反応がさらに低くなるのではないかと考えた。

《参考文献》

大塚泰正 2002 心理学的ストレスの測定と評価 小杉正太郎(編著) 川島書店
全国知的障害養護学校長会(著) 自閉症児の教育と支援 2003 東洋館出版社